



銀河の夢
星 敬編
集英社（文庫）
（6／15刊・¥280）

NHKのラジオSFコーナー用に書き下ろされた、六人の作家の短篇を収めたもの。現在進行形で放送中である。ほぼ、本書の内容通りに放送されているようだ。

はじめから、テーマは決めなかったという。だから、新鋭作家のジュニア・オールスター的な雰囲気がある。いわばお祭りですね。意識的にそう作られており、それが編者の方針なのだ。ただ、残念ながら、いま一つ散漫な印象を受けてしまう（もったも、三カ月間にと及ぶラジオの番組なら、それほどでもないのだろう）。

作品自体は、各々の作家の個性が素直に出ている、まずまずの出来。森下一仁がほのぼののストーリー。火浦功はドタバタ風。方程式もの。岬兄悟がテレビくんの話（昔、水木しげるにありました）で、夢枕獏は泣かせの入ったファンタジイ。高井信はショートショート調。大原まり子は連作シリーズの一篇。一般的な評価を裏切らない内容では、間違いなくある。しかし、アンソロジーは、一冊通して編者の作品であってほしいと思う。プロデューサーではなく、クリエイターとしての再挑戦をお願いしたい。